



流山おおたかの森教室

新規開校にあたって

流山おおたかの森駅北口から徒歩二分の場所に集団指導の流山おおたかの森教室が今年度の春期講習に開校しました。多くの方の支えがあつて開校することができました。感謝いたします。

今回この原稿を書くにあたり、まずは私の心残りから書きたいと思います。

心残りとは、私はほとんどある教室に入室していましたが、何年も担当していたその生徒たちを高校受験まで見られずにその教室を去ってしまったことです。どの会社でも学校でも異動はあります。仕方ないことだともわかっているのですが、一緒に学習して信頼関係を築いてきた(私はそのつもりですが……)生徒たちと別れてしまうのは、申し訳ない気持ちでいっぱいです。いっぱいですが、私はその教室の生徒たちは頑張ってくれれば、私はその教室の生徒たちは頑張ってくれればと信じています。全教室で掲示される公開模試の順位表や高校入試合格掲示でみんなの名前が載ることを楽しみにしています。ただ、流山おおたかの森教室の生徒も負けません!

さて、開校の話です。まずは教室ができるまでです。私が開校準備を本格的に始めたのは二月に入ってからでした。初めて私が教室に足を運んだときのことは今でも鮮明に覚えています。当たり前ですが、何もありませんでした。生徒用の机もホワイトボードも蛍光灯も、そして壁紙も。まだ内装工事をしている最中です。その中でイメージを膨らませていきました。ここに教務室があつて、

教務机は四つ、ここにこんな棚があるといいな、廊下の掲示物は……、教室の時計の位置は……、という具合に。とてもワクワクしました。その後、壁、腰壁、床の色や材質を決めて、二月二十五日に教室が完成しました。と言ってもまだ何も無い教室です。しかし、備品はなくても、夢ややる気であふれていました。ここからは、物品の搬入、搬入、搬入であつという間に今の教室ができました。

次に、開校するにあつての宣伝活動です。これが苦労しました。いや、苦労しています。三月の中の日中はポスティングか校門前で消しゴムなどのグッズを配布していました。流山おおたかの森駅前に創学舎の集団指導教室ができた、ということを知りかかったのです。そのときは残念ながら、お問い合わせをいただくことは少なかつたです。

新規開校説明会が近づいてきました。どうすれば創学舎という進学塾を知ってもらえるのか、スライドショーの内容も考え、練習もしました。そこでは、創学舎の教育理念や強み、自己学習能力の育成について緊張の中、話させてもらいました。人生の中でも五本の指に入るくらい緊張したのは覚えていますが、ただ、あつという間に終わった印象です。説明会参加者のほとんどは春期講習から通っていただいています。創学舎の教育理念にご賛同いただき、本当にありがとうございます。

今回、新規開校を経験して、「授業をできる喜び」を改めて感じる事ができました。今春の千葉県公立高校入試が終わってから、授業をする日は一週間のうち二日間だけでした。塾講師という仕事に就いてから毎日、授業をしているのが当たり前でした。一週間のうち半分以上の日に授業ができ

ないことは今までありませんでした。ここまで「授業をしたい」と思ったことはなかったかもしれませんが、「授業ができる喜び」を本当に心の奥底から感じました。また、自分だけでなく、授業をしている他の講師の声や生徒の声が聞こえてくるだけでも「幸せ」でした。授業ができるのは、もちろん生徒のみなさんが通ってくれているからであり、通わせてくれている保護者の方々がいるからです。そんな生徒たちにより良い授業をして、しっかりとコミュニケーションを取り、信頼関係を築き上げ、「創学舎に通ってよかった」と言ってもらえるよう尽力します。

最後に、流山おおたかの森教室を「笑顔が集まる教室」にしたいです。生徒、保護者、講師、事務、みんなの笑顔です。一緒に苦しみ、一緒に悔しがり、一緒に戦い、一緒に喜び、一緒に笑える、そんな教室でありたい、と思つています。これからもよろしく願ひします。(佐々木)



家庭での「コミュニケーション」は

「1対0」と「コンポイント」

面談、保護者会、お電話などあらゆる場面で、多くの保護者の皆さまとお話ができることは大変に素晴らしいことだと感じています。大切なお子さまをお預けいただいている。少なくとも「信頼をいただいている何よりの証である」と、日々感謝の念を持つと共に、毎日引き締めて取り組んでいます。

さて、保護者の皆さまから『お子さまとのコミュニケーション』に関するお悩みやご質問を多くいただきます。「子どもが自分の言うことを聞いてくれない。」「何を言っても聞かない。」「聞いているのだから、聞いていなのだか……。」「どうしたら話を聞いてもらえるのか。」「お気持ちはよくわかります。実際私たちも現場では同じような思いを抱くケースが多々あります。

しかし、よく考えてみると、私たち大人側の聞き方や伝え方にも一考の余地があるのではないのでしょうか。私自身も偉そうなことを書いていますが、多くの失敗と反省を繰り返しています。(今も毎日反省ものです。)

まずは相手を知ること、前提を持つておくことが大事です。大前提として、相手は大人ではなく、人生経験の浅い青少年です。対大人と同じようなことは期待してはいけません。(大人でも話が聞けない、理解できないという方は多くいらっしゃると思いますが……)そして、相手は家庭だけでなく、学校や塾といった別の社会でも生きていくということとです。当然、それぞれの社会の中で一生懸命取り組んでいるだけでなく、それぞれの場で悩みや問題を抱えているはず。さまざまな社会、場

さまざまな顔や側面を持っているという事は、悩みや問題も大きなものから小さなものまで、それぞれにあるはず。聞いてほしいこと、悩みなどは一言では言い表せないということを理解しておくことが大事です。

次に、なぜ聞いてもらえないかについて考えてみます。あり得ることとして、①大人側が経験則で長く話し過ぎてしまう。②昔の話を蒸し返してしまっている。③塾の問題、学校の問題、家での問題が混ざってしまっている。①について、皆さまも「経験があると思います」「あー、また長い説教が始まったよ」とか、「この人、話を聞くと言いながら結局自分で話して終わっているよな。」とか……。これは完全に聞かなくなりますが、これは次の②と③にもつながります。②と③が入ること、話が長くなるのみならず、聞いてほしいことや悩みに対して焦点がぼやけてしまいます。結果、何が大事で、次にどんな行動に移してみようかわからなくなり、「もう、いいや。」となってしまう。



ここまでお読みいただければおわかりだと思います。いかに大人側の話を短く、内容をピンポイントで伝えていくかで、お子さまに伝わりやすいコミュニケーションの改善の一助になるのではないのでしょうか。

大人側は基本聞き役に徹する。ポイントは①お子さま9に対して大人は1の発言。②お子さまから発せられたキーワードを拾い、そこだけに焦点をあてて話す。①については、とにかくお子さまに言わせてください。もちろんいきなりは話せませんから、大人から具体的に話題をふります。「学校の勉強で、理解するのに困っている教科、授業はない?」「部活の顧問の先生とはうまくやれてい

る?」「クラスや部活の友達とうまくやれている?」「塾の勉強で困っている教科はある?」など、出来る限り具体的に、答えやすい質問を投げかけてください。「別に」「特にない」という答えがすぐに返ってくる可能性があります。これについては「最近焦っているようだから聞いてみた」とか、「実際、宿題を慌ててやっているようだから気になって話してみたの」など、目の当たりにしている事象や気が付いたことを基に話を続けます。こうなると少しずつでも口を開きます。(それでも開かない場合は考えがまとまっていないほど多岐にわたるか、結構根が深いかも知れません。塾のことであればすぐに教室にご相談を。)

次に、お子さまの言葉に出てくるキーワードをうまく拾ってください。話には聞いてほしいことや悩み、アドバイスが欲しいことに関するキーワードが複数出てきます。そのワードが重要です。(いずれ書く予定ですが、言わせることで「言語化」につながり、言語化することで、お子さま自身の意識に刻み込まれ『思考』に繋がります。そのあたりはまたいずれ。)

お子さまが一通り言い終えたら、ピンポイントでどうした方がよいか、どう対処することで良い方向に向かえそうか話します。大事なのはここで過去の話を蒸し返したり、話を広げたりしないこと。あくまでピンポイントに、その話題に対してのみです。

短くても、お子さまが理解でき、有意義と感じられれば会話の頻度も上がり、コミュニケーションの改善に役立ちます。ぜひご参考に。

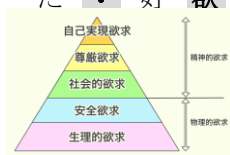
最後にもう一点、お子さまとの接し方や話における悩みの皆さま、お一人で抱え込まず、遠慮なく創学舎の講師陣にご相談ください! (青木)

集団知①

● 集団知の続きである。今回から学ぶことの意義について。

● 実は、学ぶことの意義について書きますと予告はしたものの、正直戸惑っている。個人的には、こういう紙面では書き尽くせない程の情報と分析を蓄えてきたが、とにかく読んでいただかなくてはならない。どういう展開にするか、小中高で学ぶ教科に限定するとしても全教科に触れるのかなど迷いは尽きない。またあまり長くないようにすることも、必要である。展開は書きながら考えることとしたいので、ご理解いただきたい。

● さて、私は生徒と対するとき、心がけている視点がいくつかあるが、その大きな一つが「この生徒は、一人できちんと食っていけるのか」ということである。教育の目的・理想には、数多の書籍があり、その一部は読んできたが、現場で教えているとどうしてもマズローの欲求階層論が気になる。人間の欲求を五段階に分類したものでご存知の方も多いと思う。 **第一段階・生存の欲求**(食、べ、寝るなど生命としての本能的な欲求)。 **第二段階・安全の欲求**。 **第三段階・親和の欲求**(他の人に大切にされたい、受け入れてもらいたいという欲求)。 **第四段階・自尊の欲求**(分り易くいえば心から自分を好きになりたいという欲求)。 **第五段階・自己実現の欲求**(理想の自分になりたいという欲求)。



● 第一段階から順に満たさなければ、第四段階・第五段階にはたどりつけないとされる。自分の半生をふりかえっても、その通りだと思う。十年先は分からないが、現時点では戦争の危機は

なく、塾に通っている生徒の大部分は第一階段・第二段階はある程度満たされていると思う。問題は、生徒達が社会に出て、働いて自分の力でちゃんと生活を送っていけるかということである。つまり、大人になって第一・第三段階を自力でつかんでいけるか。具体的にはブラックな職場ではなく、世の役に立ち、一定の収入を得て、ちゃんと食事と休養を取り安心できる場所に住み、病いやけがにも一定の備えがあり、社会から孤立することなく生活していけるかということである。

● 親は、自分の子がある程度の学校に進学をしてくれると安心をする。高卒でも、安定した会社に就職してくれると安心する。 **いずれも**の部分で達成する可能性が高くなるからである。私自身の子育てはとくに終わらなかつたが、今振り返るとこういうことを強く願っていたと思う。

● で、生徒と向き合う時も **が最大の関心事**である。従って、申し訳ないが、次のような視点で生徒を見てしまう。将来この生徒は、きちんとコミュニケーションが取れるか? 割り当てられた仕事が済んだとき、ポーツとするのか、それとも周りを見て他の人の手伝いをするのか? 粘り強く工夫してくれそうか? 伝票など見たとき、数字の間違いに気付きそうか? 空気が読めるか? 意地の悪い所はないか? ずるい所はないか? 目標を設定する能力はあるか? 目標に向かって精一杯努力した経験はあるのか?

● 余計なことを考えず、成績を上げてくれという親も多だろう。まったくその通りである。しかし、こうした視点は成績を上げるために必要であり、その一部は受験勉強を通して養うことが可能なのである。(以下次号) (小林)